西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

上尾筋遺跡
下尾筋遺跡

平成元年度遺跡所在確認調査事業に伴う発掘調査報告

1990・3

宮崎県西都市教育委員会

序

西都市は、西都原古墳群等の歴史的な景観と、豊かな緑や自然に恵まれた内陸都市で、四季の移りかわりとともに、住民の愛着心を育んできました。

近年は、社会構造の進化に伴ない、農村地域までも都市化がすすみ、埋蔵文化財への影響も懸念されているところであります。

本年度、国庫補助事業として実施しました遺跡所在確認調査は、古代日向国の中心地として衆目の上尾筋・下尾筋遺跡でございました。

そこには、日向国分寺跡や推定日向国府跡、さらには国府に関係した印鑰神社等が保存され、調査の結果は古代・中世・近世の古資料を裏づけさせるような大きな成果をあげました。

この報告書は、その成果を刊行し、後世の研究資料として供するとともに、埋蔵文化財に対する認識と理解を深めていただき、また研究の一助ともなりますればまことに幸いであります。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり、種々ご協力を賜った土地の所有者、ならびに地域住民・関係者の皆様に対しまして、衷心から厚くお礼を申し上げます。

平成２年３月３１日

西都市教育長　平　野　　平

例　　言

1. 本書は、遺跡所在確認調査事業に伴い、平成元年度に実施した上尾筋・下尾筋遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、西都市教育委員会が実施した。調査組織は次ぎのとおりである。

調査主体　西都市教育委員会

教育長　平野　平

社会教育課長　清　郁男

同文化財係長　黒川忠男

調査員　日高正晴（西都原古墳研究所長）

緒方吉信（同嘱託）

蓑方政幾（主事）

調査作業員　篠原　時江・黒木トシ子・緒方タケ子・久保田要子・藤原　秋子

長谷川クミエ・野田タツ子・野田サエ子・野田　良子・関屋　敏子

佐伯　民孝・杉田　ヨシ・浦辺　繁美・笹前　芳雄・国府　勲

整理作業員　福田　頼子・野田　良子

3. 遺物の実測・トレース・図面の作製は蓑方が行った。
4. 本書第2章第1節は緒方が、第3章まとめは日高が執筆し、その他は蓑方が執筆した。
5. 本書の編集は蓑方が行った。
6. 本調査による出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保存し、展示される。

本　文　目　次

第1章　はじめに …… 1
第2章　調査の概要 …… 2
　第1節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2
　第2節　調査の方法と概要 …… 3
第3章　まとめ …… 17

挿　図　目　次

第1図　上尾筋・下尾筋遺跡位置図
第2図　発掘調査地点位置図 …… 9
第3図　C地点遺構・遺物分布図 …… 11
第4図　F地点遺構・遺物分布図 …… 12
第5図　H地点遺構・遺物分布図 …… 13
第6図　P地点遺構・遺物分布図 …… 14
第7図　出土遺物実測図 …… 15
第8図　出土遺物実測図・拓影 …… 16

図　版　目　次

図　版　1　A・C・F・H地点遺構・遺物検出状況 …… 21
図　版　2　J・M・N・O・P地点遺構検出状況 …… 22
図　版　3　出土遺物 …… 23

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
1001	西都原古墳群	大字三宅・妻・童子丸・右松	古墳	古墳
1002	清水西原古墳群	大字清水・三宅	古墳	古墳
1003	上ノ原遺跡	大字清水字上ノ原 寺山	散布地	古墳～平安
1004	寺山遺跡	大字清水字寺山	散布地	古墳
1005	清水遺跡	大字清水字大黄・松崎 竜丸原	散布地	弥生～古墳
※ 1006	下尾筋遺跡	大字三宅字尾筋東下 尾筋西下	散布地	弥生～平安
※ 1007	上尾筋遺跡	大字三宅字尾筋東上 尾筋西上	散布地	弥生～平安
1008	日向国分寺跡	大字三宅字国分	寺跡	奈良～江戸
1009	国分遺跡	大字三宅字国分 大字右松字梶田	散布地	縄文～江戸
1010	上宮遺跡	大字三宅字上ノ宮東 上ノ宮西	散布地	弥生～平安
1011	上宮古墳	大字三宅字上ノ宮西	円墳	古墳
1012	上宮城跡	大字三宅字上ノ宮西	城跡	中世
1013	三宅城跡	大字三宅字原口	城跡	室町～安土桃山
1014	諏訪遺跡	大字三宅字里沙門 大字右松字梶田	散布地	縄文～古墳
1015	諏光遺跡	大字三宅字諏光・諏義寺 右松字梶田	散布地	弥生～江戸
1016	堂ヶ島遺跡	大字三宅字西畑・前田山 大字妻字東区	散布地	弥生～平安
1017	寺崎遺跡	大字三宅字寺崎 大字右松字梶田 大字妻字上妻	集落跡	弥生～江戸
1018	上妻遺跡	大字右松字梶田 大字妻字上妻	散布地	縄文～江戸
1019	経塚	大字妻字上妻	経塚	平安
1020	油光遺跡	大字三宅字名崎 大字右松字梶田 大字妻字名上田	散布地	弥生～江戸

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
1021	童子丸遺跡	大字童子丸字園ノ内・上園 寺ノ馬場	散布地	縄文～江戸
1022	上園古墳1号	大字童子丸字上園	円墳	古墳
1023	上園古墳2号	大字童子丸字上園	円墳	古墳
1024	上園古墳3号	大字童子丸字上園	円墳	古墳
1025	石貫遺跡	大字三宅字石貫平ノ下	散布地	縄文～江戸
1026	原口遺跡	大字三宅字原口二ノ西 原口・原口二	散布地	弥生～平安
1027	寺原遺跡	大字三宅字寺原・寺原原	集落跡	弥生～平安
1028	丸山遺跡	大字三宅字丸山・西都原東 西都原西	散布地	弥生～平安
1029	西都原遺跡	大字三宅字童子野・犬元ノ上 寺松二	散布地	縄文～古墳
1030	住・山路城跡	大字三宅字上田津ヶ丸	城跡	中世
1031	四日市遺跡	大字岡富字四日市	散布地	奈良～平安
1032	有軍城跡	大字岡富字有軍	城跡	室町～
1033	祇園原遺跡	大字右松字祇園ノ上	散布地	縄文～古墳
1034	新田原古墳群	大字右松字祇園ノ上	古墳	古墳
3001	松本塚古墳	大字三納字宮田36	前方後円	古墳
3002	松本遺跡	大字三納字松本・戸町 岡中	散布地	古墳
3003	松本原遺跡	大字三納字松本原・日平原 大字清水字三宅・鳴鹿・松本下	散布地	縄文～古墳
3004	長野原遺跡	大字三納字長野原	散布地	縄文～古墳
3005	永野遺跡	大字三納字武園・永野 丸田	散布地	弥生～古墳
3006	鴨目原遺跡	大字三納字鴨目	散布地	縄文～江戸

第1図　上尾筋・下尾筋遺跡位置図

第１章　はじめに

西都市には特別史跡西都原古墳群をはじめ茶臼原古墳群・三納古墳群・三財古墳群等650基程の古墳が点在している。中でも、西都原古墳群は前方後円墳32基を含む300余基の大古墳群で、さらに、そのうちの群集地域を整備し、全国でも第１号の風土記の丘（史跡公園）として保存されている。

また、その西都原古墳群の南側中間台地には、奈良時代に置かれた日向国府や日向国分寺・同尼寺等の跡も保存されていることから、西都市は古代より政治・文化の中心地として栄えていたところであり、日向国の古代史研究上最も重要な地位を占めている。

さらに、西都原古墳群東側中間台地も前述した地域同様、昭和60年度実施した遺跡詳細分布調査等によって多量の土器片とともに古代瓦が発見され、国衙・郡衙等の存在も推定されることから、重要地域として注目される。

一方、西都市は、まちを全面的に造り変える大規模な都市計画事業と農村基盤整備事業を市の二大施策として大がかりに取り組み、「調和のとれた＜まち＞づくり」に向けて、着実に発展してきました。現在もこれらの事業に伴い各種の工事が実施されているが、中でも区画整理事業は大規模な事業の一つで、市街地についてはほぼ完了し、今後は中間台地を含めた周辺地域の事業が実施されると予測される。

また、これらの事業に伴い市街地はもとより周辺地域も住宅建設が急ピッチに進められている。

よって、本調査はこのような諸開発によって遺構等への影響も懸念されることから、開発の予測される周辺地域（中間台地）を中心に、遺跡の所在状況を確認し、遺跡の保護と開発事業との調整に資することを目的として実施した国庫補助事業である。この調査は年次的に実施する計画であるが、本年度は西都原台地の南側中間台地に所在する上尾筋遺跡・下尾筋遺跡を対象に発掘調査を実施した。

調査は平成元年11月21日着手し、平成２年３月６日に終了した。

第２章　調査の概要

第１節　遺跡の位置と歴史的環境

西都市の中央市街地妻町の西辺に、海抜50～80ｍ程の古墳で周知される西都原が在る。

洪積世台地の西都原は、九州山地から南南東に向って岬様に細長く西都平野へ突出した台地で、南端には産土神の三宅神社が創建されている。

この神社地から急坂を下ると、中間微高地の大字三宅字上尾筋・下尾筋とつづき、約1,000ｍの道路が南に向って直進し西都平野となる。上尾筋はまた、北辺が東部の字地国分と接し、宮崎県指定史跡日向国分寺跡が保存されている。

国分寺・国分尼寺は、奈良時代に建立された寺院であるが、後年、全国的に拡まった荘園制下では、徐々に衰退の途を辿ることとなり、約４町歩の広域を有した日向国分寺と同尼寺も例外とはならなかった。

江戸期寛政年間（1789～1801）、衰亡寸前の日向国分寺を再興したのが、異端の放浪者と呼ばれた行脚僧の木喰上人であった。

跡地の堂宇には、像高3.15～3.35ｍの同上人が作した木造五智如来像が安置され、寺域とともに往時の国分寺を偲ばせている。

国分寺の創建については、律令政治の統制下に於いて、仏教の信仰も政治の中に組み入れ、国力の充実や発展に資せようとする目的があり、天武天皇（673～686）の頃に、国土安寧を説く金光明経等の経典信仰が起った。

この国家的な信仰が、聖武天皇の治世になると政治的にもより具体化し、国分寺創建の構想がたてられてくる。そして天平13年（741）３月、国ごとに国分寺と国分尼寺創建の詔が発令される。

日向国分寺に関する記録はおそく、「続日本紀」の天平勝宝８年（756）12月20日の条に、越後・丹波等日向を加えた26国が始めて記載されることから、天平13年に詔が発せられてより、天平勝宝８年までの15年の間に日向国分寺は創建されたこととなる。

また国分両寺は、国府の近くに置かれるのが全国的な通例であったことから、日向国分寺跡から推察し、日向国府の創建地は極めて近い位置に所在したと考察される。

古代日向国と現代宮崎県とはまた、必ずしも重なり合ってはいなかった。古代末期頃までの日向は、現宮崎県と鹿児島県囎唹郡の全域が含まれた広範囲の日向国であった。

そして、和銅２年（709）には薩摩国司の名が現われてくることから、そう遡上らない時代に薩摩国が独立し、ついで和銅６年頃に隼人征討が行なわれ、この年日向国の四郡が割かれて大隅国が誕生している。

西暦645年に実施された大化改新は、それまでの県主や国造等の豪族が私有した土地や

人民までが、大和朝廷の支配下に置かれ国郡制の新しい時代となる。

この国郡制により、各国の政庁として置かれたのが国府であり、日向国府も設置されたが、その時代は詳らかにされていない。

日向国府の設定地は、推定として上尾筋地域内に所在するが、大字三宅のうちの西都原周辺であったことは大方の定説であり、現推定地とそう遠く離れていない地域であって、妻地方とはまったく無関係の土地とは考察されない。

国府近くにはまた、その国の重要な神社を集めた総社が設定され、国司の参詣を便ならしめたとされ、日向国の総社は、妻市街の北辺に位置する都万神社、あるいは日向国分寺跡から見上げる三宅神社の説もある。

さらには、国司が用いた国印や文印、これらを納めるに使用した鍵（鑰）等を納めた院倉があり、この院倉が神格化したとする印鑰神社が、今も下尾筋に残される。この神社は大字三宅の内ではあるが、他所から移転したといわれている。

前述した西都原には、昭和27年３月特別史跡となった西都原古墳群が保存されるが、309基の古墳群の内、前方後円墳５基・円墳13基は、上尾筋・下尾筋地域に所在する。

この地域の遺跡所在確認調査を本年度に実施したものであるが、昭和60年度に実施した遺跡詳細分布調査では、遺物の散布地上尾筋遺跡と下尾筋遺跡とし、特に弥生時代から平安時代までの遺物が多く採集された。

上・下尾筋は、出土した遺跡や遺物から考察するとき、弥生時代、特に古墳時代に入る頃から急速な生産活動の発展を示し、また西都平野を足下に置き、古墳群台地の南に位置した微高地は、生活環境も最適の地であって、国郡制の新時代には大集落も形成されたであろう。

そして、西都原だけでなくこの地域までも、前方後円墳を主とする古墳群が所在することは、古墳時代に引きつづき歴史時代に於いても、この地域が古代日向国の中心的な役割を果してきた、歴史的な環境を持つ地域であったということができる。

緒　方　吉　信

第２節　調査の方法と概要

まず、調査地の選定から入ったが、今回多くの地主のかたのご協力を得て、16箇所発掘調査を実施することとなった。調査は幅１ｍのトレンチを対象面積に応じて設定し、調査箇所は順次Ａ～Ｐ地点とした。なお、本遺跡の基本土層は第Ⅰ層が表土（攪乱土）、第Ⅱ層が黒色土、第Ⅲ層がアカホヤ層、第Ⅳ層が黒褐色ローム（硬質）、第Ⅴ層が褐色ローム（柔質）、第Ⅵ層が黒褐色ロームである。

Ａ地点

下尾筋遺跡の北西部で、対象地内には西都原古墳群第308号（円墳）が存在している。トレンチを南北に２本設定して調査を行った。結果、第１トレンチより葺石及び周溝が検

出されたが、葺石の検出状態及び周溝の方向、さらにはトレンチ南側で周溝が西方へ屈折していること等から第308号墳は前方後円墳の可能性が強いと思われる。

第2トレンチからは、ピット（柱穴）が検出されているが、遺物が共伴しておらず、時代的なことは不明である。

遺物は、わずかであるが、土師器・須恵器・陶器・染付等が出土している。

B地点

A地点の90m程南西で、A地点とは2m以上もの高低差がある。また、北側の土地より1段低いことから削平されており、アカホヤ層は確認できなかった。トレンチは、作物の関係で1m×10mを3ケ所設定して調査を行った。第1～第3トレンチより土坑及びピットが検出されたが、第3トレンチの土坑は、一辺2.1mの方形を呈し、西側には降り口とも思われる堀込みを付している。深さは1.3mで、第V層の褐色ローム層からその下層の黒褐色ローム層・砂利層・粘質の黄褐色土まで掘り込んである。陶器・染付・磁器等が共伴しているが、これらから、近世の遺構と思われる。第1・第2トレンチの土坑・ピットの中には、電柱の支線の枕木等も出土しているものもあり、新旧の遺構が混在している。

遺物は、その他に土師器・須恵器がわずかに出土している。

C地点（第3図）

下尾筋遺跡の南西部で、台地の縁辺部に位置している。西に向けて地形が傾斜しているが、トレンチはその傾斜にあわせて東西に3本設定し調査を行った。結果、北東に向けて平行している2本の溝状遺構が検出された。1号は幅2.1～2.3m・深さ0.9～1.15m、2号は幅0.9m・深さ0.5m、どちらともV字溝で、溝内には多量の土器片が混入していた。そのほとんどが弥生土器片であったが、器形・文様の特徴から弥生時代中期に比定される。

1は口縁部が29cm（復元推定）を計る大型の壺で、口縁部は鋤先状を呈し、その上には円形浮文を2個単位で施している。口縁端部には刻目を施し、頸部に1条、胴上部に2条、さらに胴中部に2条、計5条の突帯を巡らせている。2は口縁部径15.5cm・現存高19cmを計る甕型土器で、口縁部は若干内湾しながら立ち上がっている。胴上部に1条の突帯を巡らし、柱状の底部を有した気品のある土器である。

その他、遺物は陶器・白磁等が出土しているが、貴重な資料として垂木先瓦（図版3）が出土している。3分の1程の破片であるが、蓮弁は刻み込まれ、その蓮弁のすべてに孔が穿ってあり、さらに、剣菱が2～3箇所施されるようである。

D地点

C地点の南隣で、南側には西都原古墳群第309号が存在する。トレンチは、東西に6本、さらに、古墳の周溝を確認するために3本設定して調査を行った。本調査地は表土を除いてC地点同様第V層の褐色ローム層以下が残存する。各トレンチより、土坑・ピット群等

が検出されたが、第1トレンチにはC地点のV字溝の延長と思われる遺構を検出した。しかし、撹乱されており、良好な状態とはいえない。また、古墳の周溝については確認できなかった。

遺物は、土師器・須恵器・陶器・磁器等のほかに石鏃・打製石斧が出土しているが、中でも貴重な発見となったのは軒丸（鐙）瓦が出土したことである。鐙瓦は（第8図12・図版3）先端の部分のみで、12葉の蓮弁を施し、直径19㎝（復元直径）・厚さ4㎝を計る。その他に瓦が2点出土しているが新しく、当時の瓦としてはわずかに1点のみである。

E地点

下尾筋遺跡の中央部で、B地点の東約80mに位置している。南北に3本のトレンチを設定して調査を行った。各トレンチより、土坑・ピット群等が検出されたが、第2トレンチの南側からは30㎝前後の石を配した遺構が検出された。共伴遺物から奈良時代の遺構と思われる。遺物は土師器が主体で、須恵器・陶器・染付等が出土しているが、注目されるのは小破片ではあるが唐草文様を施した軒平瓦（図版3）が出土していることである。

F地点（第4図）

下尾筋遺跡の南東部で、D地点とは道路を隔てた反対側に位置している。また、本調査地は昭和60年度実施した遺跡詳細分布調査において、大量の土器片が採集されたところである。トレンチを東西に3本設定して調査を行った。結果、住居址を2軒検出することができた。1号住居址は、遺構検出のレベルと表面との差がわずか20㎝程で、南側が撹乱されており、はっきりとは断定できないが、2.7mの方形状を呈していると思われる。2号住居址については不明な点が多いが、1号住居址と同様の規模と推定される。この2軒の住居址は、共伴土器等から弥生時代中期後半前後のものと思われる。

3は口縁部が「く」字状に外反した、口縁径30㎝を計る甕型土器で、口縁部下に刻目突帯を施している。4は口縁部に逆L字状の突帯を施した甕型土器で、口縁径29㎝を計る。5は口縁部が逆V字状に外反した壺型土器で、口縁径15㎝を計る。これらは1号住居址内から出土している。

G地点

上尾筋遺跡の東中央部に位置し、西都原古墳群第282号（円墳）と第227号（前方後円墳）に挟まれた地域である。よって、周溝確認を中心としたトレンチ調査を行った。結果、ほとんどのトレンチから周溝が検出されたが、注目されるのは第282号墳が前方後円墳と確認されたことで、現存は15m程であるが確認した範囲では第227号墳（現50m程）をも凌ぐ規模である。周溝は幅3.3m、深さ0.7㎝を計る。第227号墳の周溝は後円部で、幅約6m、深さ0.6mを計る。

その他の遺構は、土坑・ピット等が検出されている。中でも第３トレンチの土坑は直径1.7ｍの円形で、上部より須恵器の３b期に相当する杯（第８図11）が完形で出土している。遺物は、土師器・須恵器・陶器・磁器等が出土しているが、須恵器の占める割合が他地点より断然多いことが特徴としてあげられる。

層の残存状況は、割にアカホヤ層が全体的に残っており、以下、黒褐色ローム・褐色ロームと残存している。

Ｈ地点（第５図）

Ｆ地点と道路を隔てた東側に位置している。トレンチは東西に２本・遺構確認のための小トレンチ１本の計３本設定して調査を行った。層の残存状況は、第１トレンチ東側でわずかにアカホヤ層が確認されただけで、全体的には第Ｖ層の褐色ローム以下が残存している。

遺構は、第１トレンチより住居址・土坑・ピット群、第２トレンチよりピット群が検出された。住居址は、１辺が５ｍ程で弥生土器が共伴している。

遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・磁器・磨製石鏃等が出土している。中でも弥生土器はわずかの調査区にもかかわらず4,500点も出土している。器形・文様等から弥生時代後期後半に比定される。なお、弥生土器については、東隣地の畑地にも相当量の破片が散在しており、この地一帯には大集落があるものと推定される。

Ｉ地点

下尾筋遺跡の最南端、台地縁辺で南眼下には烏子古墳（西都原古墳群）を望むことができる。また、Ｆ地点と道路を隔てた南側に位置している。

南北に２本のトレンチを設定して調査を行ったが、攪乱が著しく、遺構としては、第１トレンチよりわずかのピットと不安定な土坑が検出されたのみである。

遺物は、土師器が主体で、その他弥生土器・須恵器・陶器等が出土している。

Ｊ地点

下尾筋遺跡の東中央部、台地縁辺に位置し、西側には西都原古墳群第237号が存在している。トレンチを南北に３本設定し調査を行った。第１～第３トレンチ内より防空壕と推定される土坑を検出した。天井部は既に陥没して埋土しているが、埋土中より土師器の杯や皿の完形品（第８図７・８）をはじめ多量の土師器・縄文土器・弥生土器・須恵器・陶器・磁器・布痕土器等が出土している。

このようなことから、周辺地域には相当量の遺構が存在するものと推定される。

Ｋ地点

下尾筋遺跡の北東部、台地縁辺に位置し、西側には西都原古墳群第235号・第236号が隣接している。また、Ｋ地点は南側畑地より一段低く、後世に削平されているようである。

トレンチは東西に２本、さらに古墳の周溝を確認するためのトレンチ１本の計３本設定し調査を行った。第１トレンチよりピット群、第２トレンチよりピット群・溝状遺構・配石遺構、第３トレンチより土坑が検出されたが、周溝は削平されているため検出できなかった。配石遺構は、第２トレンチの東側より検出されているが、何の遺構か判断がつかない。共伴遺物から近世の遺構と推定される。

遺物は、陶器・磁器が出土している。

Ｌ地点

Ｋ地点の南100ｍ、さらに南側には印鑰神社が祭られている。トレンチを南北に２本設定して調査を行ったが、第１トレンチより土坑・溝状遺構・ピット群、第２トレンチより溝状遺構が検出された。遺物は土師器・須恵器・陶器・磁器・布目瓦・鞴口等が出土しているが、これらは上部撹乱より出土したもので、遺構に共伴していないことから時期的なことは不明である。

層の残存状況は、北側がアカホヤ層以下、南側が第Ⅳ層の黒褐色ローム以下が残存している。

Ｍ地点

下尾筋遺跡の北部、Ｋ地点とは西都原古墳群第236号を隔てた反対側に位置している。東西に１本のトレンチを設定して調査を行った。土坑・ピット群・溝状遺構さらに第236号墳の周溝が検出された。周溝は浅く0.4ｍ、幅約5.0ｍを計る。

遺物は、土師器が主体で、その他、須恵器・陶器・磁器・染付・土錘等が出土している。

層の残存状況は、ところどころアカホヤ層が残存しているが、全体的には第Ⅳ層の黒褐色ローム以下が残存している。

Ｎ地点

上尾筋遺跡の南西部で、北側には西都原古墳群第233号（前方後円墳）が存在し、さらにその周囲は日向国府推定地として周知されている地域の南側に位置している。南北に２本のトレンチを設定して調査を行った。第１トレンチより土坑及びピット、第２トレンチより溝状遺構が検出されたが、第１トレンチ南側の土坑は検出状況等から住居址と推定される。対象地が狭く限られていたため確認できなかったのが残念である。

遺物は、土師器・須恵器・染付・布痕土器（第８図11）が出土している。

層の残存状況は、第Ⅱ層の黒色土、第Ⅲ層のアカホヤ層以下が残存している。

Ｏ地点

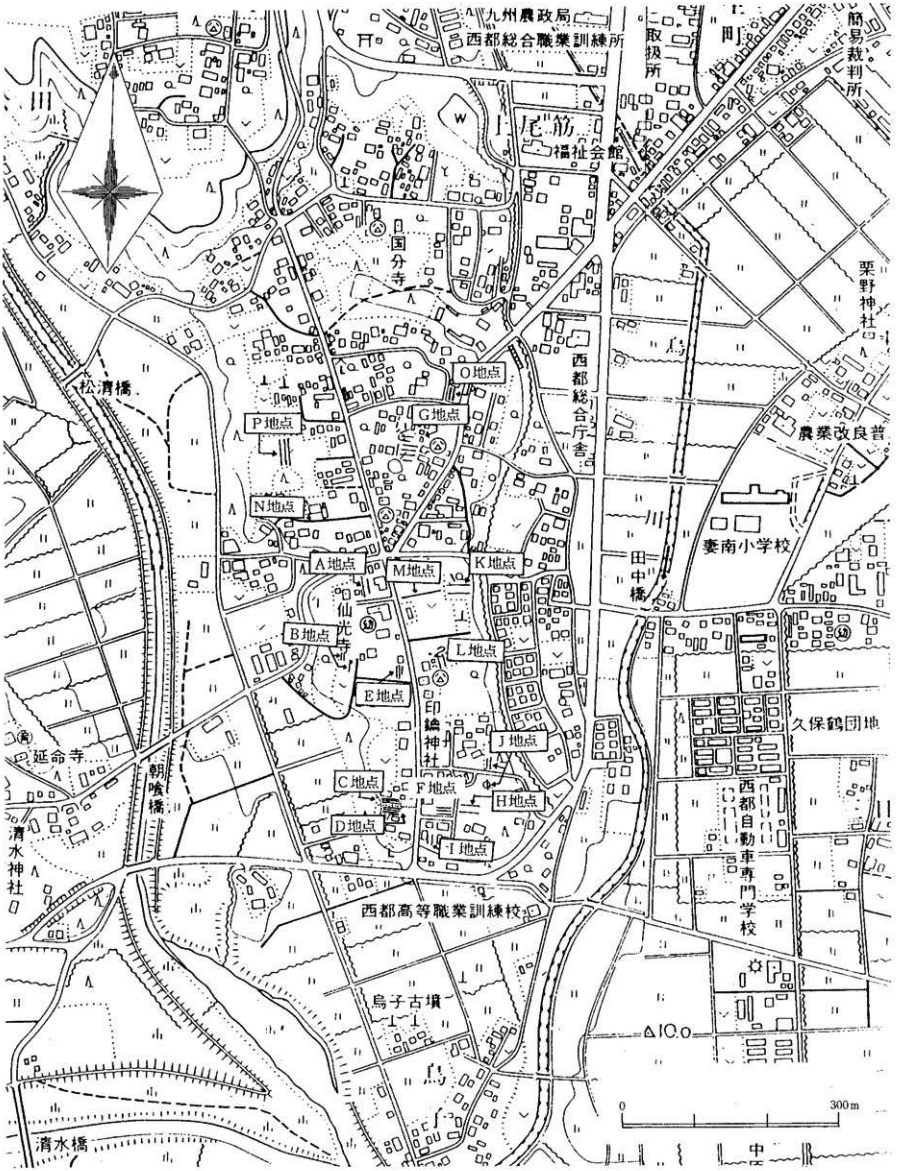
上尾筋遺跡の東中央部で、西側には西都原古墳群第225号（柄鏡式前方後円墳）が存在している。南北に２本のトレンチを設定して調査を行った。両トレンチよりピット群が検出された。

遺物は、土師器が主体で、その他縄文土器・須恵器・陶器・青磁・染付・土錘が出土している。

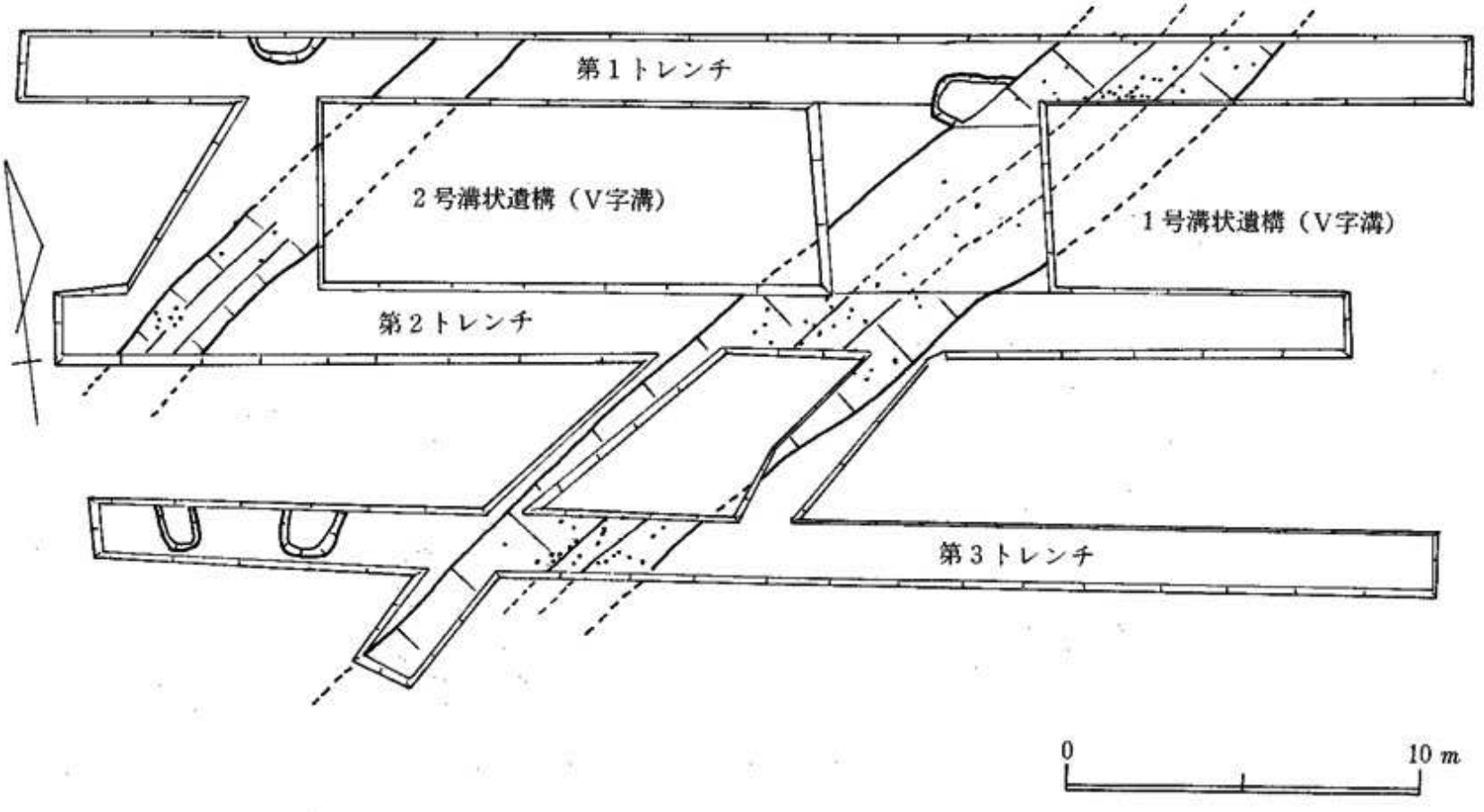
P地点（第6図）

上尾筋遺跡の西中央部で、日向国府推定地内に位置している。また、南側には隣接して西都原古墳群第233号が存在している。南北に3本のトレンチを設定して調査を行った。第1トレンチより住居址（1号）・ピット群、第2トレンチより地下式墳の竪穴・土坑・溝状遺構・ピット群、第3トレンチより住居址（2号）・土坑・溝状遺構・ピット群が検出された。さらに、各トレンチより第233号墳の周溝も検出された。1号住居址は1辺4.1m、2号住居址は1辺3.5mで、時期としては弥生時代後期前半前後に比定される。地下式墳については、現状保存が好ましいという判断から、竪穴のみの検出に留まった。ピット群については、北側に集中しているようで、これらのピット群が即日向国府に伴う遺構なのかは判断できないが、同時代頃に比定される土師器やわずか1点ではあるが布目瓦等が出土しており、今後さらに検討していかなければならないであろう。

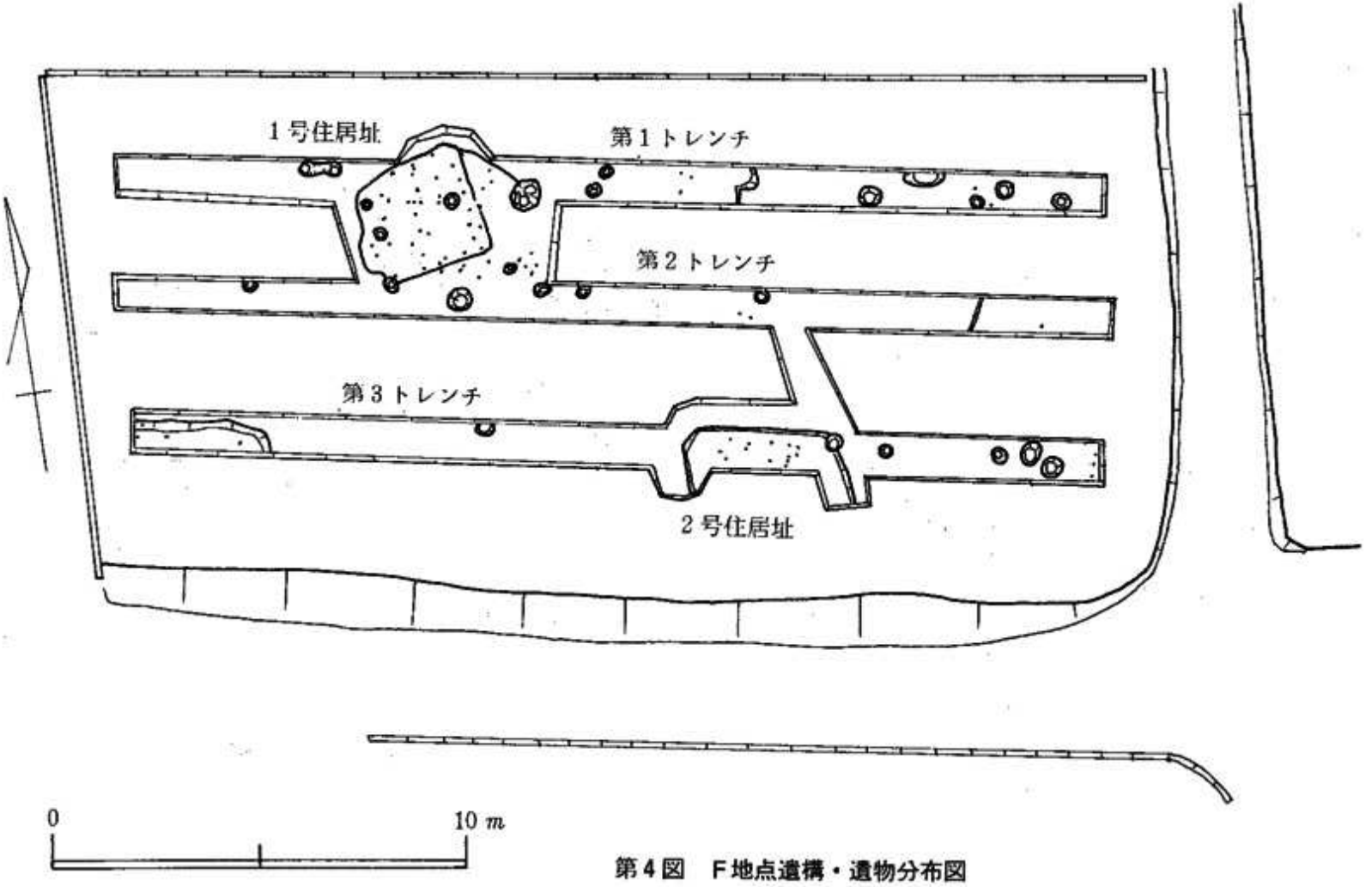
遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・青磁等が出土している。



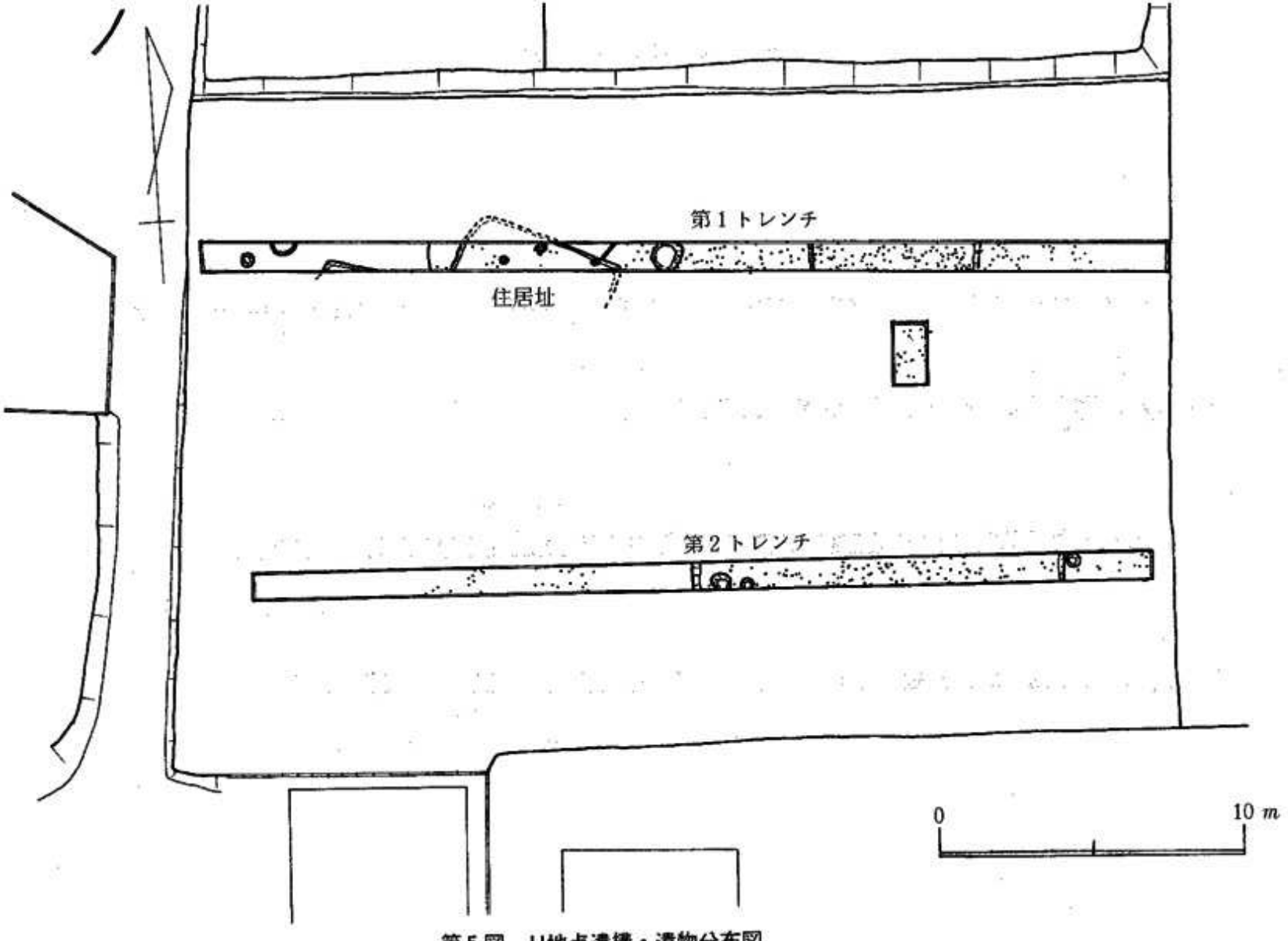
第2図　発掘調査地点(トレンチ)位置図



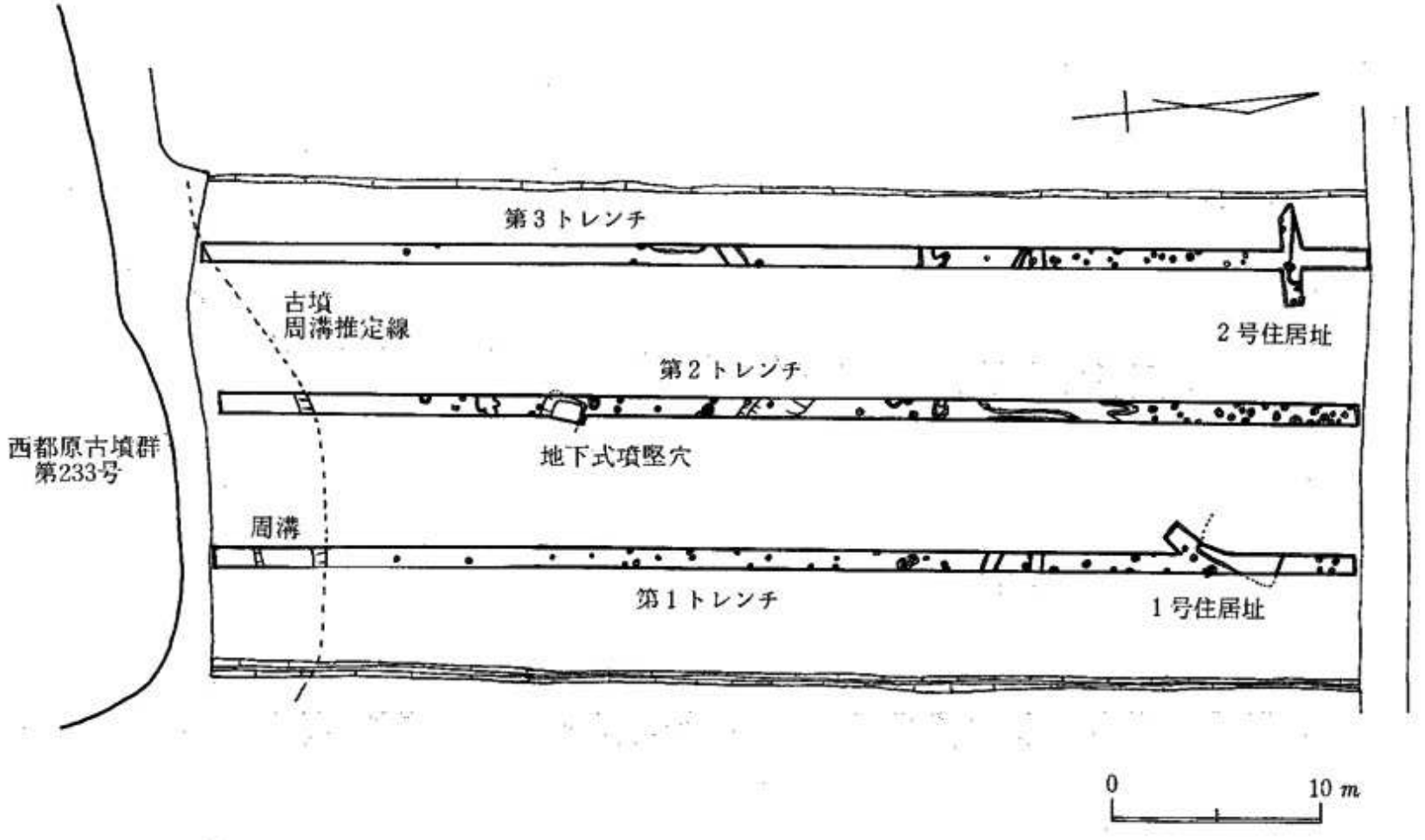
第3図　C地点遺構・遺物分布図



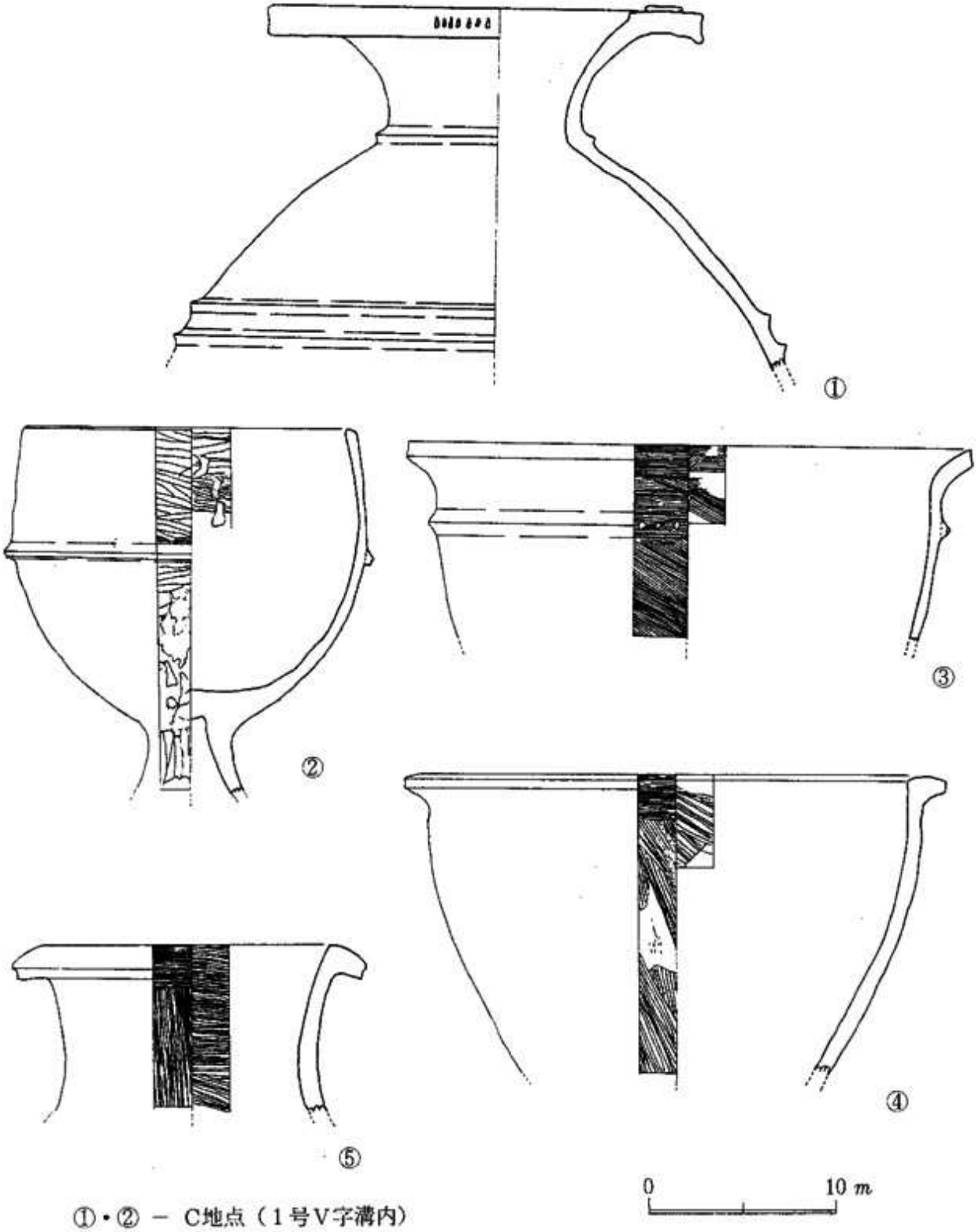
第4図　F地点遺構・遺物分布図



第5図　H地点遺構・遺物分布図

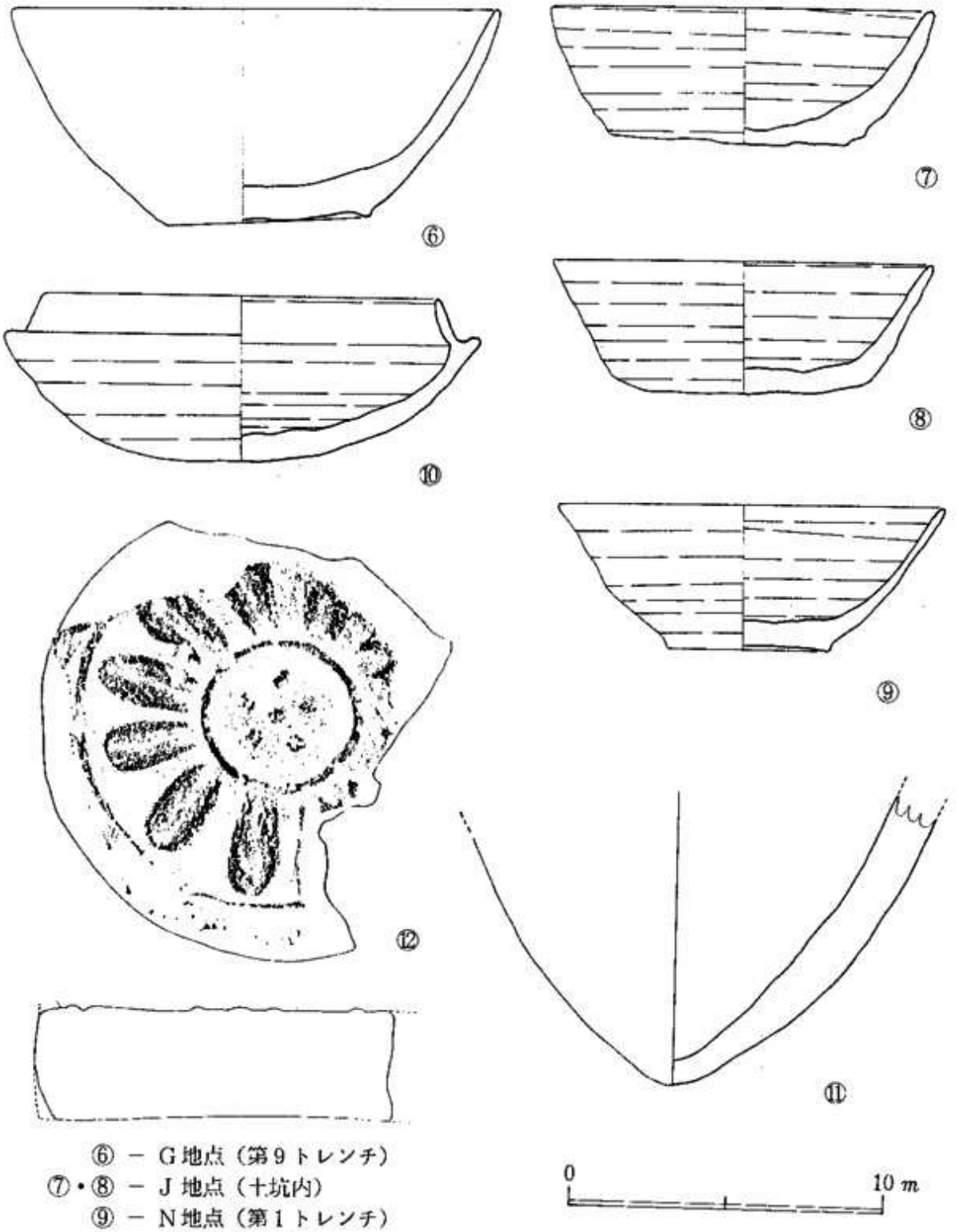


第6図　P地点遺構・遺物分布図



①・② － C地点（1号V字溝内）
③～⑤ － F地点（1号住居址内）

第7図　出土遺物実測図



⑥ － G地点（第9トレンチ）
⑦・⑧ － J地点（土坑内）
⑨ － N地点（第1トレンチ）
⑩ － G地点（土坑内）
⑪ － N地点（第1トレンチ）
⑫ － D地点（第1トレンチ）

第8図　出土遺物実測図・拓影

第3章　まとめ

このたび遺跡所在確認調査を行った西都市三宅の尾筋地区は、西都原古墳群の中心台地より一段下って南の方へ延びた丘陵台地上にあるが、その一帯には5基の前方後円墳も存在し、古代日向において、西都原時代の集落形成に関連を有している地域でもあるので、この確認調査はそれなりに関心をもたれていた。そのことは、有史時代になって、上尾筋のすぐ東の方に日向国分寺が設置され、また、律令時代の官衙に関係のある印鑰神社も下尾筋に存在している。この三宅台地の尾筋地区につき、A～P地点まで16ケ所を選び確認のための事前発掘調査を行った。調査結果は、13ケ所の調査地点が土師器を主体とした遺跡であり、残りの3ケ所が弥生時代の遺跡ということになる。そして、古墳時代の遺跡に関連のある須恵器も散見できたが、何といっても、古代における日向の中心地帯ということもあって、それらに関わりをもつ遺跡が多かった。それでは、尾筋地域の16ケ所の確認調査の中で、注目される主な遺跡について以下述べてみたいと思う。まず最初にふれたいことは、下尾筋のC、D、Eの各遺跡から単独出土ではあるが、奈良時代の鑑瓦・垂木先瓦、それに唐草文様の軒平瓦などがそれぞれ出土したことである。特に、垂木先瓦は、従来、この地方では出土したことのない出土品であり、このたびの発掘調査がただトレンチを入れるだけの試掘的調査であったので、この3点の瓦類が出土したことが遺構との関連で、遺跡の実態を把握することはできなかったが、その周辺には、当時の寺院跡が存在するのかもしれない。また、各遺跡で豊富に出土した土師器であるが、全般的に奈良、平安様式の土器であり、さらに興味深いことは、最近、製塩業と関係があるといわれる布痕土器が比較的多く確認できたことであるが、さすがに日向の律令期における中心地域であったことを再認識させられた。次に、上尾筋遺跡G地点の調査では、282号円形墳の東側トレンチ内に周溝状遺構が現われたので、さらに検討を加えてみると、この282号墳の墳丘を中心に前方後円墳の前方部の周溝部であることが確認できた。そしてこの周溝から推定される墳丘は南に方位を有する約50m前後の前方後円墳であることが立証できた。現在、この地には小円墳としての282号墳以外に何らの墳丘も遺存していないが、古くは、すぐ東側に並び存在する全長52mの226号前方後円墳と同じような古墳が並行して存在していたことになる。また、このG地点の調査では227号前方後円墳の北側に周溝が現われたが、P地点の233号前方後円墳の北側にも同様、周溝が確認されたが、いずれも周溝内からは葺石以外に何らの遺物も検出されなかった。それから今回の尾筋地区確認調査において特筆されることは、C地点遺跡から弥生時代のV字溝が発見されたことである。この遺跡は尾筋台地の突端まで約150m（台地の幅約250m）の地点にあり、弥生時代中期後半の時期に比定さ

れるが、ここに大小２本のＶ字溝が現われた。大形の方を１号、小形を２号と名づけたが、大形直線の１号Ｖ字溝は幅約２ｍ、深さも1.５ｍはあり、その内部からは多くの弥生土器片が検出された。この１号Ｖ字溝は、推定ではあるけれども、方向が北東から南西の方へ直線に走っており西端はこの尾筋台地の西側断丘まで延びているので、東の方も、恐らくこの台地を横断して東断丘まで達しているものと思われる。それで、このＶ字溝によって横断された100ｍ有余の台地突端部分には、同時期の弥生集落が形成された可能性があると考えていたのであるが、その後、突端部のＦ地点、Ｈ地点の両遺跡のトレンチ調査によって、そのＶ字溝と関連づけられる弥生遺跡が発見された。Ｆ地点遺跡では弥生中期末から後期初頭頃にかけての時期に相当する弥生土器が出土し、しかも、その遺跡で確認された住居跡遺構は外部に突出部をもつ多少変形した変形住居跡形態のもので、筆者らの提唱する「日向型変形住居址」[①]の初現的遺構ともみなされる。さらに道路を挟んで隣接するＨ地点遺跡でも弥生時代後半頃の土器片が多量に出土したが、この場所にも住居跡が発見された。この環濠としてのＶ字溝で区分された下尾筋突端部地区は、弥生中期から後期にかけて集落形成の地域であったと推測できる。なお、この弥生中期のＶ字溝については、昭和55年の新富町三納代の鎧遺跡[②]においても、類似した遺構が発見されている。それから、先にふれたＣ地点出土の垂木先瓦であるが、畏友の瓦研究家大川清氏[③]にたずねたところ、この瓦は畿内以外の地方出土は珍らしく、時期的にも奈良時代前半で日向国分寺建立とは別箇の系統の瓦とみなしてもよいとのことであった。

日　高　正　晴

註

① 日　高　正　晴「日向型変形住居址について」「西都古墳文化考」『西都原古墳研究所年報』第５号、昭和63年３月、西都市教育委員会

② 新富町教育委員会「鎧遺跡」『新富町文化財調査報告書』第２集、昭和58年

③ ご教示を頂った大川清氏は現在、国士館大学文学部教授で日本窯業史研究所所長をされている。

図版

[illegible]が、ここに大小2本のV字溝が掘られた。大形の方を1号、小形を2号と名づけたが、大形直線の1号V字溝は幅約2m、深さ1.5mはあり、その内部からは多くの弥生土器片が検出された。この1号V字溝は、推定ではあるけれども、方向が北東から南西の方へ直線に走っており西端はこの[illegible]の西縁断丘まで延びているので、東の方も、恐らくこの台地を横断して[illegible]ているものと思われる。それで、このV字溝によって横断された100m[illegible]部分には、[illegible]の弥生[illegible]が想像された可能性があると考えていたのであるが、その後、突端部の[illegible]地点、H地点の[illegible]によって、そのV字溝と[illegible]られる弥生遺跡が発見された。[illegible]中期末から[illegible]にかけて[illegible]に付随する弥生土器が出土し、しかも、その遺跡で[illegible]された住居跡遺構は[illegible]に突出部をもつ多少変形した[illegible]住居跡形態のもので、[illegible]の提唱する「日向型変形住居址」の初期的遺構ともみなされる。さらに[illegible]で[illegible]するH地点遺跡でも弥生時代[illegible]の土器片が多量に出土したが、この場所にも住居跡が発見された。この遺跡としてのV字溝で区分された下尾筋突端部地区は、弥生中期から後期にかけて[illegible]の地域であったと推測できる。なお、この弥生中期のV字溝については、[illegible]の新富町三納代の[illegible]遺跡においても、類似した遺構が発見されている。それから、[illegible]にふれたC地点出土の[illegible]であるが、[illegible]の瓦研究家大川清氏にたずねたところ、その[illegible]の地方[illegible]して、時期的にも奈良時代前期で日向国分寺建立とは明確の系統の[illegible]であった。

日　高　重　春

註

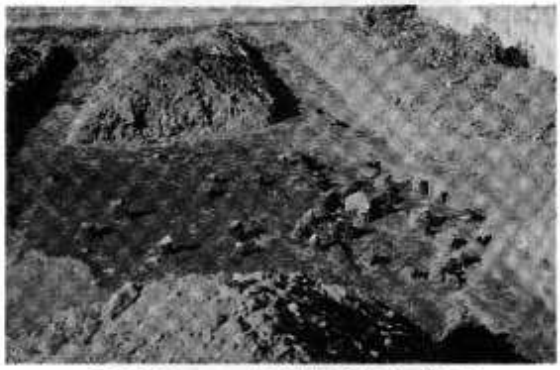
① 日　高　重　春「日向型変形住居址について」「西都古墳文化考」「西都原古墳研究所年報」第5号、昭和[illegible]年3月、西都市教育委員会

② 新富町教育委員会「[illegible]」「新富町文化財調査報告書」第2集、昭和[illegible]年

③ [illegible]で教示を[illegible]た大川清氏は現在、国立[illegible]大学文学部[illegible]で日本[illegible]研究所所長をされている。

図 版 1

A地点　遺構(周溝)検出状況



F地点　1号住居址検出状況

H地点　遺物検出状況

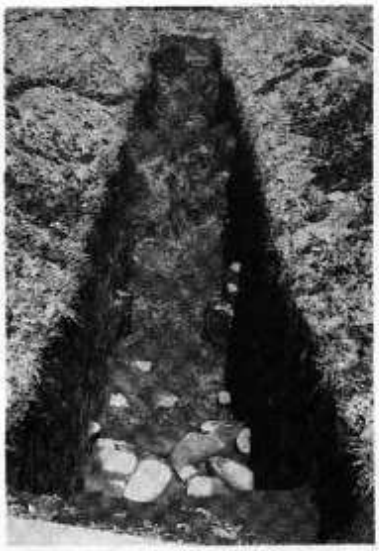
C地点　垂木先瓦検出状況

C地点　弥生土器①検出状況

C地点　遺構(1号溝状遺構)検出状況

C地点　遺構(2号溝状遺構)検出状況

図 版 2



J地点　遺構(土坑)検出状況

M地点　遺構(周溝・ピット群)検出状況

N地点　遺構(土坑・ピット)検出状況

O地点　遺構(ピット群)検出状況

P地点　遺構(住居址・ピット群)検出状況

P地点　遺構(ピット群)検出状況

図 版 3

①

②

③

④

⑤

⑦

⑧

⑥

⑨

⑩

⑪

⑫

C地点出土垂木先瓦

E地点出土軒平瓦

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書　第11集

平成2年3月31日　発行

編集発行　西都市教育委員会
印刷所　なかむら印刷所